

千年王国運動と歴史

山 本 和 人

昨年度は「千年王国運動 millenarianism」を如何に理解すべきか、その研究の前提となる方向性について考察したが、今年度はその具体的展開として二人の研究者の理解の仕方に光をあててみたい。

この運動の理解の上で最も障害となることは、それを異常と決めつけてしまうことであつた。異常のレイベリングは、運動参加者の心理的・生理的異常から社会状況の異常に至るまで、様々なレヴェルの説明に見出せるが、特定の異常に「原因」を帰す限り、それは運動の全般的理解にはつながらない。また、先行する特定の「原因」を求める態度自体がこのレイベリングを促す傾向がある。この陥穽を抜け出るためには運動を極力否定的に捉えない自覚的態度が必要である。そのような態度をとった研究者として、文化人類学者のケネルム・バリッジ Kenneth Burridge と宗教学者のミルチア・エリアーデ Mircea Eliade が挙げられる。しかし、上記の態度はあくまで研究に臨む予備的段階に過ぎない。これを踏まえて、彼等は千年王国運動をどのように理解したのか。

バリッジは、社会を道徳的システムと捉え、宗教もその中に位置づける。システムは必ずしも首尾一貫したものではなく、競合する価値体系が相争うこともある。彼は千年王国運動をそのような競合の表現と考え、新しい価値体系の定着の礎になるという点に於て、一般に短命で失敗と看做される運動は、大きな文脈で見

れば、その役割を果たし、成功であると主張する。だが、これだけでは、運動を既存の文脈より大きな視点から眺めたに留まり、異常のレイベリングを避けることはできるが、運動の説明には不十分である。彼は、運動のもつ意味を、単に研究者から見た大きな文脈、或いは抽象的視点に見出すのではなく、運動参加者とも共有できるような普遍的意味を求めようとする。その結果、運動の一般モデルを提出し、「古い規則—無規則—新しい規則」という語で代表されるような諸段階の移行の循環を発見する。

これを「移行論」と呼ぼう。この理論自体は決して彼の独創ではなく、多少の差異を看過すれば、ファン・ヘネップ Arnold van Gennep の「通過儀礼」やデュルケム Emile Durkheim の「聖と俗」、ターナー Victor Turner の「リミナリティ」に近い。また、エリアーデの「聖と俗」や「祖型と反復」の理論とも類似する。それは、日常の中に非日常が現れるとする理論であり、両者の弁証法的関係から動的に宗教や社会が成立するとする考えである。しかも、エリアーデの場合は非日常の方に重点を置く。彼は普遍的宗教の在り方を問うためにこの二元論を用いるが、千年王国運動も例外ではない。通常の神話や儀礼では周期的な聖性の顕現、根源への遡及を通して宇宙の再生が図られるが、千年王国運動はそのような周期性をも否定したより根源への回帰を希求するものだと見られている。

移行論と一口に云つても、一般には文化人類学—社会学系の理論と宗教学系の理論は一般に異なつたものと見られている。前者が文字通り「非日常—日常でないもの」の機能性を追求するのに対して、後者では非日常が積極的にもつ意味が考慮される。そしてそれは確かに、バリッジとエリアーデの両者の説明の差異にも

現れている。だが、寧ろ注目したいのは、異常のレイベリングを避けようとした二人の研究者が類似の理論を提出していることであり、差異よりも類似性こそが千年王国運動とその理解に手掛かりをもたらす筈である。移行論は、単なる日常と非日常の二元論と異なり、その時間的移行の側面を強調する。エリアーデにとっては、それは普遍的聖俗理論の時間的局面的意味合いがあるが、バリッジはターナーのリミナリティを支持しつつも、時間的移行を単に空間の二元論的分割と等価に捉えているわけではない。彼は、運動のモデルを移行論に適用することで、因果的説明ではない、現実の運動とは緩い関係をもった説明を試みる。つまり、この理論はただ社会や宗教の諸事象を日常と非日常に分類するものではなく、異常のレイベリングを支えてきた「原因」の追求という因果論的説明原理に代わる説明原理であり、それ故にこそ彼等が取り上げたと考えることができるのである。

移行論がもたらすものは、既存の千年王国運動解釈とは別の方法論上の理解の仕方の提示に留まらない。しかし、移行論自体は原因の追求を排除するものではない。事実、バリッジやエリアーデはしばしば運動の「原因」を語っているし、移行論だけですべてを説明したことにはならないのも承知している。それでも移行論を必要としたのは、ひとつには異常のレイベリングへと傾きやすい因果論的説明の視野の狭さであろうが、同時にこの説明に欠如している要因を導入せねばならなかったためでもある。バリッジは、運動参加者にも運動観察者——研究者にも偏らない普遍的意味の追求の必要性を説いた。エリアーデは、多様なあらゆる宗教現象を根源づける普遍的宗教を再構成する企ての一環として運動を解釈した。これは、狭義の因果論的説明が歴史内の要因に限定

されるのに対して、因果論が外的要因を導入するのに適しているのと対応している。

この外的要因とは「普遍性」のような抽象的な脆弱な概念ではない。運動参加者と運動観察者を横断するような運動理解の前提であり、それでこそ「普遍」と呼ぶるのであり、異常のレイベリングを免れることができる。これを言い表すことは難しい。バリッジは「超越的力の介在」とも呼んでおり、エリアーデにとっては「聖」である。だが、彼等独自の用語の文脈を離れるならば、これは「歴史」と名づけても差し支えないと考えられる。もちろん、「歴史」という語も曖昧で多義的であり、彼等の属する西洋文化の伝統の影響が色濃い。にも関わらず、彼等の理論そのものが、その方法論の確立の途上での歴史との格闘の結果であり、バリッジとエリアーデではその評価は百八十度異なるが、歴史へ強い関心を寄せ、更に千年王国運動自体が優れて「歴史的」であることにしても一致している。卑見では、それを一概に「普遍性」へと結びつけることには懐疑的である。「歴史」に関わるからこそ普遍的であるのではなく、参加者と観察者という一見異質と見える者の邂逅から「歴史」が析出してきたと見る方が適当であろう。それでも、運動理解のひとつつの方向性を示している意義は大きい。